

杉田 洋著

よりよい人間関係を築く
特別活動

図書文化

一八九〇円

やさしく語りかける杉田節。筆者を含めて、全国にそのファンは多い。本書は、その杉田節で、特別活動の意義やあり方を、こんこんと論してくれる著書である。

「理念は変わりません」。この度の学習指導要領の改訂を象徴する言葉である。その中で、杉田調査官指導による小学校特別活動チームのみが、基本的には変わること

がないとされる「目標」にまで手を加えた。特別活動が「特別」な活動である根拠は、何なのか。改訂へとつき動かしたものは、杉田先生の積年のこの思いである。

「望ましい集団活動を通して」というひとことが、今日、歴史・社会的、そして文化的にこれまで以上に、意味をもつようになった。

筆者もそれを、「『個』が孤独の『孤』に、『集』が群衆の『衆』に

なった」と憂いている。教育の究極の論理は、「個と集」の関係性

にある。この個と集の関係に真摯に向かい合うのが、特別活動である。そうであるならば、特別活動は元来、教育の究極の課題に

応える、または応えようとする領域である。杉田先生のそうした誇りが本書には一貫して流れている。そう感じるのは筆者だけではないであろう。

その証左は、序章「ある少年の物語と特別活動」から始まるユニークな章立て構成からも垣間見ることができ。特別活動への取組は、杉田先生にとって運命づけられたライフワークでもあった。

つづく第1章〜第3章は、「よりよい人間関係を築く」という視点から、万華鏡のように、「人間関係構築力」にいたる特別活動の歴史（第1章）、現在の子どもの

実態と置かれている状況（第2章）、それにより学校がかかえる問題とその解決の方途としての特別活動力の育成の必要性（第3章）へと展開。調査官の立場でありながら、現状を厳しく映し出し

ている。

第4章〜第6章は、いわば基礎理論編にあたる。特別活動で人間関係をどう築くか（第4章）、人間関係の形成の進め方が総論的かつ具体的に教示される。また、「人間関係をつくる学級活動」に

焦点化した集団づくりの方法が、理論編（第5章）と実践編（第6章）のセットで提案されている。第7章と第8章は、いわば発展

編である。児童会・生徒会活動、クラブ活動、教科等とのかねあい（第7章）や、今後の課題とプランづくりとして、学校づくりにおける全体計画に果たす特別活動の役割とその工夫である（第8章）。

第9章における、教師自身の人間関係形成能力を高めるためのスキルアップへの杉田先生の祈りにも似た提案で、終章となる。杉田先生の全エネルギーを傾注したと思われる必読書である。

(1) 概括しただけで、わくわくした先生方は多いであろう。日本教育における特別活動の役割のすべてが含まれているからである。

(2) 今日求められている教育書

は、単なる理論本でも、実践書という名のハウ・ツー本でもない。

「集団とは何か」。それ自体の哲学に真摯に踏み込んだうえでの、実践書である。だが、その種の要望に応える著書は、これまであまりなかったと言わざるをえない。

(3) 本書に書かれているように集団活動は「もろ刃の剣」である。「集団の力」という点でも、自由と平等のバランスがうまく機能しなければならぬ。自由に偏れば、平等という視点からはわがままとなり、他の個を潰すことになり。平等に偏れば、息苦しい社会

となり、やはり「個」の伸長を圧迫する。ではどうすればよいか。永遠のテーマに、真摯に答えている。

(4) 特別活動においてめざすべき人間関係そのままに、上から目線ではなく、同じ教師の目線で課題に答えている著書である。

ぜひ熟読していただきたい。それも教師だけではない。保護者にも紹介してほしい一冊である。

（新富康史 國學院大学人間開発学部長）